

予示した行為がデリケートであることを 受け手に推察させる手続き —指示表現を体言止めの形式で産出する事例をめぐって—

杜 長 俊

1. はじめに

「聞きたいことがあるんだけど」や「お願いがあるんだけど」のようになんらかの行為を予示する発話を産出した直後に、話し手は予示した行為（質問や依頼）を実行する代わりに、ものや場所を示す表現を持ち出すことがしばしばある。その中に、発話がさらに続くことを示す場合（上昇調のイントネーションや音声の引き延ばし）や、発話がそれらの表現で完結していることを示す場合（下降調のイントネーション）がある。本稿では、依頼や質問を予示した直後に、ものを指し示す表現を後者の仕方で産出する発話は、相互行為上何を達成しようとしているのかを明らかにすることを目的とする。本稿の分析対象となるのは、次の例が示すような現象である。

- 1 A: ちょっと聞きたいことがあるんだけど.
- 2 B: うん.
- 3 A: あの:お祝い.
- 4 (0.5)
- 5 B: あ いいよ いいよ そんな.

本稿の分析対象は、以下の特徴を持つ。①ものを指し示す表現（言葉）が産出される発話のイントネーションが、その表現の終わり（語尾）に向かって下がる②その表現が実際に完結した後に、一定の間合いが生じるという特徴を持つものである。例えば、上の例の3Aの「あの: お祝い.」という発話は、「あの:」とイントネーションがやや上がっており、金品を指す表現（以降、指示表現¹⁾とする）の終わり（お祝いの「い」の部分）に向かってイントネーションが下がっている。しかも次の発話まで0.5秒間の間合いが生じている。本稿では、こうした産出の特徴を、便宜上、「体言止め」と呼ぶことにする。最終的には、以上の特徴を持つ発話が、受け手にどのような反応を引き出そうとしているのか、実際の事例の分析を

通して明らかにする。

2. 本稿の位置づけ及び使用データ

2.1 本稿の位置づけ

質問や依頼などの行為を予示した直後に、それらの行為の実行にあたって指示対象について受け手が認識できるかどうかは確実ではない場合に、受け手の認識問題に対処するため、「試行標識」が利用されることがある。「試行標識」とは、Sacks & Schegloff (1979) が指摘した現象で、指示表現を「上昇調のイントネーション」で産出し、指示表現に関するなんらかの不確かさがあることへの志向や配慮を示すことで、指示表現が指す対象（人、もの、場所等）を相手が認識できるかどうかを調べる活動を開始するものである。日本語でも同様の現象が報告されている（串田 2008）。

一方、本稿の分析対象のように、指示表現の発話を下降調のイントネーションで産出する場合がある。この場合は、指示表現に関する不確かさがないことを示し、相互行為上、試行標識と違う働きを果たすことができると、ひとまず言えよう。本稿では、指示表現に関する相手が認識できるという主張をすると同時に、発話を完結させ相手に発話順番を渡すという特徴に着目し、これらの発話の機能を明らかにする。具体的に言えば、質問や依頼等の行為を予示した直後という位置において、以上の特徴を持つ形式が相互行為の中でどのように用いられ、どのような課題に対処しようとするのかという観点に立ち、体言止めの形式による働きを果たしているのかについて解明しようとする。

2.2 本稿の使用データ

本稿が使用するデータは、筑波大学人文社会研究科の高木智世氏が所有するものである。研究上の使用（高木氏以外の研究者による使用も含む）について所有者が収録者及び収録協力者に許可を得ており、本稿での使用について筆者が所有者に許可を得ている。使用データの収録者は、高木氏の「社会言語学演習」という授業（2003年、筑波大学）の受講生である。収録協力者は、それぞれ結婚し、プライベートでもよく会う姉妹である。

このデータは、姉の「梨の購入の件で電話した」という留守電のメッセージを妹が聞いてかけた折り返しの電話である。収録の日一緒に梨を買いに行くことの誘いが電話の用件であることが二人に了解されている。用件に関する話が終わった後に、様々な話題が続き、電話は20分にも及ぶものとなっている。話題に関しては、収録者による指示や制限が一切なかった。本稿では、この電話会話から分析対象が含まれる事例（2例）を抜粋し分析を行っている。各事例を提示するにあたり、筆者が実際の音声データに基づき、Jefferson (1985)

が会話分析のために開発した表記法を用いて表記を行っている。表記法については、記号の一覧表を参照されたい。

3. 行為を予示する現象について

本稿の分析対象の特徴の一つは、質問や依頼という行為を予示した発話の直後に産出されていることである。以下は、これまでの研究蓄積を紹介し、この特徴をより具体化していく。行為を予示する典型的な発話の一つとして、「質問していいですか (Can I ask you a question)」という発話がある。この発話は、これから質問を行うことについて許可を求める形で、質問という行為を予示している。Schegloff (1980) では、このような発話を“action projector”と名付け、以下の分析を示している。

まず、このような発話は、直接に質問することを控えていることから、予示された質問は、質問者がストレートに聞くことができないなんらかの理由があるものとして理解される。しばしば、このような発話の後に、「○○って分かる？」などのように、質問に関連する何かに関して受け手の認識を確かめ、質問が問題なく実行できるように、準備作業を行っている。つまり、この場合は、予示した質問に先立ち、質問に関わる準備作業を行うことで、直接に質問することができない理由を明らかにしている。この場合の「質問していいですか」という発話は、本題の行為を先に予示することで、その行為の準備を差し挟むことを可能にするものである。この特徴から、Schegloffはこの現象を前置きの前置き (pre-pre) と名付けている。同様の現象について日本語でも報告されている (森 2008)。

また、「質問していいですか」という発話は、単刀直入的に質問の行為を避けようとしている。このことから、質問がなにかデリケートなものであることを示していると理解される場合もある。「デリケート」とは、社会通念に属する類のものもあれば、個別の相手に「慎重に聞くべき理由や事情がある」というようなものもある。いずれにせよ、重要なのは、「質問していいですか」という発話を用いた場合は、予示された行為がなんらかの水準でデリケートなものであることを示すことができるということである。この場合の「質問していいですか」という発話は、デリケートな行為の前置き (pre-delicate) と名付けられている。

以上の分析を提示した Schegloff (1980) では、この二つの場合は、あらかじめ区別されているものではないと主張している。具体的に、Schegloff は、前置きの前置き (pre-pre) として産出した発話が、受け手にデリケートな行為の前置き (pre-delicate) として理解される事例と、デリケートな行為の前置きとして産出した発話が、受け手に前置きの前置きとして理解される事例の分析を通して、この二つの可能性は、実際に会話参加者の間で理解の齟齬が生じうるものであり、会話参加者が自身のふるまいを通して区別を可視化していくも

のであると示唆している。次の章では、この示唆を踏まえて、本題行為が予示されている状況において、指示表現の発話を体言止めの形式で産出することで何を達成しようとしているのかについて、実際の事例を用いて明らかにしていく。

4. 分析結果

4.1 デリケートな行為について受け手が即座に推測できた事例

次の事例(1)では、8行目で「質問」の行為が予示されており、その直後に10行目で指示表現の発話が体言止めの形式で産出されている。以下は、10行目までのやりとりを確認しておく。この事例の直前には、一緒に梨を買いに行くことをふみこ(姉)が誘ったが、ゆうこ(妹)は都合がつかないという理由で、自分の分も買ってきてほしいと依頼している。1~7行目で二人は、電話の用件「梨の購入」に立ち返り、未来の事項・展開を約束していることから、この電話が終結に向かっている。

事例(1) [お祝い]

- 01 ゆうこ： そんで まあ u:- それ: は- 梨のほうのあれが:
 02 ふみこ： ん[:.
 03 ゆうこ： [済む話が?:
 04 ふみこ： [ん.
 05 ゆうこ： [はっきり: い- (.) >買ってきたっていうんが< 分かったら:
 06 ふみこ： 電話する:.
 07 ゆうこ： うん:. 連絡くれれば.=
 08 ふみこ： →= >あ あと一つ 聞こうと思ってたんだけど[:<
 09 ゆうこ： [うん.
 10 ふみこ： →.h あの:: (1.2) お祝い.
 11 (1.0)
 12 ゆうこ： い(h)い(h)よ(hh). [h そ(h)ん(h)な(h).
 13 ふみこ： [いい(hh)いや(hh)
 14 い(h)い(h)よ(hh) じゃ(h)な(h)く(h)って(h) .h い(h)や(h)だ(h)h
 15 い:っつも わ(h)す(h)れち(h)やうんだけど(hh) hoho[hohoo hhh
 16 ゆうこ： [h h h
 17 ふみこ： .h だから(hh) あ:れ? .hh さ:んでいいんだっけな:
 18 って思ってたんだっけど:

6・7行目で約束が交わされた直後に、8行目でふみこは「あ」と、なにかを想起したことを示している。このことから、電話が終結に向かう隙間に、新たな話題を切り出そうとしていることが分かる。実際にも、「>あと一つ 聞こうと思ってたんだけど;<」と、質問を予示し、電話の用件と異なった新たな話題を開始している。そして、ゆうこが聞く用意があることを示した（9行目）後に、ふみこは「.h」と息を吸い、「あの::」と言いよんだ後に間合いを空けている。こうして、受け手が聞く用意があると示したにもかかわらず、実質的な発話の産出を遅延させている。このことから、質問の産出に向けて話し手（ゆうこ）が慎重な態度を示していると言えよう。

そしてこの後に、10行目で「あの:: (1.2) お祝い。」というように、指示表現の発話が産出されている。質問が予示されている状況において、「お祝い」という指示表現を用いる発話は、質問の対象を明らかにし、質問を実行するための準備を行うものとして理解することができる。例えば、「あの:: (1.2) お祝い?」というように、指示表現に関して何らかの不確かさがあることを示し、予示した質問を問題なく行えるようにその不確かさを解消する場合がある。この一方で、「あの:: (1.2) お祝いのことだけど」「あの:: (1.2) お祝いね」等のように、指示表現を相手が認識できるという想定を踏まえて、質問の対象を提示し質問に移ろうとする場合もある。以上の二つの場合との比較では、10行目の「あの:: (1.2) お祝い。」の発話は、指示表現を相手が認識できるという想定を示しているものの、その想定を踏まえて質問に移ろうとしていないという特徴を持っている。

以上述べたように、この発話は、指示表現を相手が認識できるという想定を示しておきながら、質問に移ろうとしないという点が特徴的である。この特徴から、次の二つの分析ができる。第一に、この発話は、控えている質問に移ろうとせず、相手が指示対象を認識できるという想定を示している。このことから、指示対象を相手が当然認識できることについて話し手が主張していると言える。また、「お祝い」という指示表現は、祝賀の金品で、基本的に特定の誰かに贈るものである。ここでは、相手が当然認識できることを主張していることにより、単なる祝賀の金品だけではなく、二人のこれまでの生活史や人間関係に関連しているものとして理解されるであろう。つまり、この発話は、お祝いという指示表現に関わる二人の生活上の記憶を呼び起こすものとなっている。

第二に、この発話は、質問の対象について認識の問題がないと想定していながらも、予示した質問の産出へ移行しようとしていない。このことから、話し手が質問の産出に向けて慎重になっていることが示されている。このように話し手は質問を予示した後に、慎重な態度を一貫して取っている。この態度の表明により、この質問はなんらかの理由・事情によって

デリケートなものになっているという理解が可能となっている。以上の二つの分析をまとめると、この発話は、予示された質問がデリケートな行為であるという含意をもたらすとともに、デリケートである理由について受け手が二人の生活史から探す機会ともなっていると見えよう。

次は、以上の分析について受け手の反応から検討する。12行目でゆうこは、「い(h)い(h)よ(hh). h そ(h)ん(h)な(h).」と、お祝いを受けることを拒否している。つまり、お祝いとは第三者に贈るものではなく、自身（または自身側の人間）に贈るものであるという理解を示している。こうして聞き手は、自身に贈るお祝いについて相手が聞こうとすることが相手にとってデリケートであると、二人の生活史から質問がデリケートな理由を見つけている。同時に、デリケートである理由について、暗黙の了解を示している。この意味において、ゆうこの反応は、予示された質問が話し手にとってデリケートな行為になっていることを即座に推察できている。

ただし、ゆうこにしてみれば、自身に贈られるものであるという理解を端的に示すと、当然のようにお祝いを受け取る意志を表示することとなるという相互行為上の課題がある。ここでゆうこは、笑いを伴った拒否をすることで、贈呈に対する礼儀上の遠慮を示し、その課題に対処している。さらに、礼儀上の拒否に対しては、ふみこは次に贈呈を強く勧めることができる。実際に、13・14行目でゆうこの断りを拒絶し、15行目で質問（お祝いについて聞くこと）の理由^[2]を述べ、17行目で「…さ:んでいいんだっけな:…」と質問を産出している。

4.2 デリケートな行為について受け手が即座に推測できなかった事例

4.1で述べたように、事例(1)は、予示した行為がデリケートなものであることについて受け手が推察できている事例である。4.2では、受け手がすぐに推察できなかった事例を分析する。このような事例の分析を通し、話し手がどのような反応を引き出そうとしていたのかを明らかにするとともに、本稿の主張を検証する。次の事例(2)は、5・6・8行目のゆうこの発話が分析対象である。この事例の直前に、ゆうこはふみこに借りたCD（プリンターに関わるソフト）をインストールできたことについて、報告しお礼を述べている。ふみこはその報告を「よい報告」として受け止めている（1行目）。

事例(2) [プリンターのインク]

01 ふみこ： >そっかそっか< ん: u-そ- じゃあ [それはいいってことね:].

02 ゆうこ： [ん:].

- 03 ゆうこ： そう。
04 ふみこ： [[うん。
05 ゆうこ：→[[で: .h もう1つ
06 →[おねがいごとが(h):あるん[だ(h)け(h)ど(h) い(h)い(hh)?
07 ふみこ： [あ, うん。 [¥>はい.はい.:<¥
08 ゆうこ：→あの(h):(h) <プリンターの> インク。
09 (0.4)
10 ふみこ： ん[:.
11 ゆうこ： [を: .h あそこで >買ってくれる? <
12 (0.8)
13 ゆうこ： 今日 AAA: にいったんだけど:
14 (0.5)
15 ふみこ： あ:ないわけ:?
16 (1.0)
17 ゆうこ： 金額が: ちょっと 高いかな:
18 ふみこ： あ[↑:あ hh >そっかそっか<
19 ゆうこ： [と おも(hh)った(h)ん(h) hh
20 ふみこ： じゃあ よう ようs- ん? それはなんなんていう::番号だっけ:?

この後に、ゆうこは次のように依頼という行為を予示している。「で: .h もう1つおねがいごと…」と、この依頼は梨購入の依頼に続く二件目であることを示している。また、「い(h)い(hh)?」と、笑いを伴いつつ許可を求めている。このように、度重なる依頼が無遠慮とされうることへの理解を示すととともに、その理解があるのにもかかわらず依頼を続行する自身のふるまいを自嘲している。そして、ふみこの許可があった(7行目)後に、ゆうこは「あの(h):(h) <プリンターの> インク。」という発話を産出している。この発話は、プリンターのインクという指示表現を用いて、依頼内容がプリンターのインクに関連していることを示している。さらに、「<プリンターの>」と、この部分の産出速度を顕著に落とすことから、依頼内容が「プリンター」と関連していることを際立たせていると言える。しかも直前に二人がプリンターのソフトについて話したことから、この指示表現(プリンターのインク)は、プリンターに関連した以前のやりとりと結び付けて理解されるであろう。このような状況において、指示表現の発話は体言止めの形で産出することで、何を達成しようとしているのであろうか。

第一に、この発話は、下降調のイントネーションで産出し、指示表現に関する相手の認識の不確かさが無いことを示している。この点について、高木(2009)^[3]では、「有標的な音調を用いて区切られる」^[4]と記述しており、「指示表現について相手が当然に認識できるはずであるということを主張し、受け手による認識・理解の表示を誘っている」と述べている。さらに本稿では、次の特徴に注目する。この発話は、認識に関わる問題があるわけでもないのに、依頼の核心へ向かおうとしていない。つまり、相手が当然認識できていることを示すために、あえて依頼への進行を止めているというように、相手の認識可能性を強く主張している。このことから、この指示表現は、単なるプリンターのインクではなく、二人の生活史に関わるものとして理解される。

第二に、認識の問題があるわけではないのに、依頼への進行を遅延させている。このことは、依頼の実行に向けて話し手が慎重になっていることとともに、この依頼は依頼者にとって何らかの切り出しにくい事情や理由があることを示している。つまり、この発話は、指示表現について二人の以前のやり取りの記憶(相互行為史)を呼び起こすとともに、言いにくい事情があるという含意を生じさせている。こうして、この依頼がデリケートな行為になる理由・事情について、指示表現に関わる二人の生活史との関連から推察するという機会が作られている。この分析の妥当性について、11行目の依頼の発話から検討する。その前に、依頼に至るまでのやりとりを確認しておく。

少しの間合いの後に、ふみこは「ん:」と、指示表現に対して認識の問題がないことを主張している。この反応は、間合いが生じた後(9行目)に産出されていることから、一定の考えを経て、認識を主張しているものとして聞くことができる。同時に、発話順番を取ることを控え、ゆうこの話の続きを促している。ここでは、依頼が予示されていることから、依頼の行為を促していると理解することができよう。この反応とほぼ同時に、ゆうこは「を:」と、発話を再開している。厳密に言えば、直前の「<プリンターの>インク。」という部分に続くものとして発話を産出している。ここでも発話を区切っていることから、依頼の実行に向けて慎重な態度が一貫して示される。そして、ふみこの「ん:」という反応と重なった直後に、ゆうこは息を吸い、「あそこで >買ってくれる? <」と、依頼を行っている。

さて、依頼を行う発話についてである。第一に、この発話は「あそこ」という代名詞を用いている。これは、プリンターのインクの購入に関して、二人が以前に言及した特定の場所があることを示している。つまり、話し手は、以前のやり取りとの関連で受け手が認識できていることを踏まえて、依頼の発話を産出している。このことから、受け手の「ん:」という認識主張の反応を、二人の以前のやり取りに関連しているものであるという認識を含むものとして扱っていると言えよう。第二に、「…>買ってくれる?<」というように、依頼を躊

躊躇なく産出している。直前に依頼の産出に向けて慎重になっているのに対し、この部分は産出の速度を速めるとともに、言い方を切り詰めていることが特徴的である。このことから、早急に依頼を切り出していると理解することができる。このように、話し手は言いにくい何かへの言及をせず、依頼の核心のみを述べているという理解が可能となっている。以上の分析をまとめると、話し手は、受け手の「ん:」という反応を、デリケートである理由を推察できたことを示すようなものとして扱い、依頼に移っていると言えよう。つまり、本稿の分析対象の発話は、指示表現に関わる生活上の共有知識を喚起し、予示した依頼がデリケートである理由を受け手に推察させることで、デリケートな部分に触れることなく依頼の行為を可能にしようとしている。

この依頼に対して、もし受諾の反応が産出されれば、何がデリケートであるのかが暗黙裡に理解されていることとなったであろう。しかし、直後に受諾の反応がなかったことを受け、ゆうこは次のように依頼の理由を明らかにしている。「今日 AAA: にいったんだけど:」というように、「AAA」という大手家電量販店に行った出来事を報告している（13行目）。この報告の趣旨は、ゆうこは大手家電量販店に行ったら、ふみこが知っている場所で購入するほうは利益があるということを発覚したため、ふみこにその場所で買うように依頼しているということである。ただし、14行目ではゆうこは「~んだけど:」の後に間を開け、依頼の理由の明示を遅延させている。これに対して、ふみこは在庫がないことが依頼の理由であるという自らの理解を示している。この理解表明により、実際の依頼の理由（値段が安いから）のほうは合理性・妥当性が低いことが目立ってしまい、ゆうこは値段の差という依頼の理由を明示せざるを得なかった。このように、一般向けの店と比べ、ふみこが知る店のほうは安いという依頼の理由に言及することが、ゆうこにとって言いにくいものであったことが明らかとなっている。

以上、「相手の行きつけの店では安く購入できる」ということを依頼の理由として明示することがデリケートであったことについて、話し手は自ら明らかにしていることを確認しておいた。つまり、指示表現の認識可能性を強く主張することは、単に指示表現に関する認識を喚起だけではなく、デリケートなものに結び付く事情や理由があったということが話し手に示されている。他方、プリンターのインクという指示表現は、事例（1）の「お祝い」のような、デリケートな話題に直結しやすいものではない。このことは、受け手がすぐに推察できない理由であるかもしれない。しかし、事例（2）が示した重要な示唆は、デリケートな行為との一般的な結びつきがない指示表現の場合でも、本稿の分析対象の発話は、個別の生活史との関連でデリケートな行為を行おうとすることを受け手に推察させるための手続きとして利用可能であったことである。

4.3 考察

本稿では、依頼や質問を予告した直後に、指示表現の発話を体言止めの形式で産出する現象を分析した。その結果、指示表現の認識に関して、次の二つのことが明らかとなった。まず、これらの現象は、当該の指示表現に関して受け手が当然認識できるという主張をしているものであることが分かった。さらに、受け手の認識可能性を強調していることから、当該の指示表現は、固有の意味のみならず、会話参加者（話し手と受け手）の生活史に基づくものを指しているという理解を可能にしていることが分かった。事例（1）（2）の分析が示したように、「お祝い」と「プリンターのインク」という指示表現は、会話参加者のこれまでの生活史との関連で理解されている。

また、予告した行為との関わりにおいて、次のことが明らかとなった。本稿の分析対象の発話は、依頼や質問の行為を予告した状況で、指示表現をめぐる認識の問題がないにもかかわらず、予告した行為へ進行しようとしなない。この特徴から、予告した行為の産出に向けて慎重な態度が示され、予告した行為がなんらかの水準で話し手（行為を予告した者）にとってデリケートなものであるという理解を可能にしていることが分かった。事例（1）の分析が示したように、予告した行為がデリケートなものであることについて受け手が推察できている。事例（2）においては、受け手がすぐに推察できなかったものの、後続の発話において話し手自らが予告した行為（依頼）がデリケートである理由・事情を明らかにしている。

4章の事例分析は、これらの発話は、指示表現に関する生活史の記憶を喚起するとともに、予告した行為がデリケートであるという理解を可能にしていることを示唆している。言い換えれば、本稿の分析対象の発話は「指示表現に関する生活史の記憶を基に、予告した行為がデリケートであることを受け手に推察させる」手続きとして利用可能であることが分かった。

5. まとめと今後の課題

本稿では、なんらかの行為を予告した後に、指示表現の発話を体言止めの形式で産出する現象を分析している。この現象は、指示表現について相手が当然認識できるということを主張するとともに、予告した行為に向けて慎重な態度を示している。事例分析の結果、こうした発話は、「生活史という水準の共有知識を喚起し、予告した行為がデリケートなものになりうることにについて受け手に推察させる手続き」として利用することができることが明らかとなった。

最後に本稿の分析結果について、Schegloff（1980）との関わりで簡潔に論じる。本稿の分析対象の発話は、本題行為を予告した後に、指示表現に関わる共有知識を呼び起こしている。こうして、生活史という水準における認識を確立するという、本題行為の準備を行って

いる。この一方で、本題行為（質問や依頼）への進行が期待されている状況において、認識の問題があるわけでもないのにも関わらず、本題行為への進行を止め、本題行為の実行に向けて慎重な態度を示している。これにより、本題行為が話し手にとって何らかの水準でデリケートなものになっているという理解が可能となるわけである。以上述べてきたように、本稿の分析対象の発話は、本題行為に向けてなんらかの準備をしているものではあるが、指示表現に関する認識の問題を解消するようなものではない。むしろ、本題行為が話し手にとってデリケートであるという含意をもたらし、受け手に指示表現に関わる生活史の共有知識からその含意を推察させることで、デリケートな部分に触れなくとも、本題行為を行うことを可能にしているものである。

本稿で取り上げた2つの事例では、発話の産出の特徴を「下降調のイントネーション」と記述したものの、指示表現の音声のバリエーション^[5]が見られている。そのバリエーションにより、相互行為上異なる意味をもたらし可能性があると思われる。その可能性を検証するため、一定の数のデータが必要となる。また、指示表現に関しても、「お祝い」「プリンターのインク」というように、ものの指示表現しか分析することができなかった。人や場所の指示表現が使用される事例を検討することで、分析の厚みを増やすことができると思われる。今後の課題とする。

注

- [1] 本稿でいう「指示」とは、会話の中で人・物・場所・出来事等を指し示す現象を指す。指示の方法として、「指さし」という非言語的な手段もあれば、指示詞や人の名前のような言語的な方法も利用可能である。本稿では、言語的な指示方法を「指示表現」とする。
- [2] ゆうこには三人の子供がいるが、ふみこの質問はその一人に贈る成人式のお祝いに関わっている。実際に、事例の直後にふみこは、「以前にゆうこの別の子供へのお祝いで包んだ金額」を確認し、金額を忘れていたことが質問をする理由であったことを明確にしている。
- [3] 高木（2009）は、事例（2）を以下の関心のもとで分析している。スムーズではない依頼が産出される中で、会話参加者の親しい関係性に問題が生じており、やりとりの中でその問題を解決することで、親しさという関係性が実践されていくという、相互行為の過程での関係性の構築に関心がある。また、「プリンターのインク」という発話に関しては、高木（2009）は指示表現の認識をめぐる相手との関係性が参照されているということを示唆している。この点において、「相互行為内外の関係性」に結び付く認識を喚起することで何を達成しようとしているのかについて、本稿はデリケートな行為の前置きとの関連で、新たな示唆を提供していると言える。
- [4] 事例（2）の「プリンターのインク」という発話について、高木（2009）と本稿の表記の違いについて説明する。高木（2009）では、「<プリンターの> インク」と、「インク」の部分において発話の進行を有標的な音調で止めるという特徴を表記している。これに対し、本稿は、「<プリンター>の インク」と、指示表現の終わりの部分に向かって発話のイントネーションが下がりがつつ、最後の音節に強勢がおかれるという特徴を表記している。
- [5] 事例（1）と事例（2）とも、発話のイントネーションが指示表現の語尾に向かって下降してい

るが、事例(2)は、「プリンターのインク」の語尾が、声門閉鎖音でありしかも強く発されることから、語尾において音調が平坦と聞こえる場合である。

参考文献

- Jefferson G. (1985) An exercise in the transcription and analysis of laughter. In T. A. van Dijk (Ed.) Handbook of discourse analysis vol. 13. New York: Academic Press. pp. 25-34
- 串田秀也 (2008) 指示者が開始する認識探索—認識と進行のやりくり—『社会言語科学』10-2, pp. 96-108
- 森純子 (2008) 「会話分析を通しての「分裂文」再考察—「私事語り」導入の「～のは節」—『社会言語科学』10-2, pp. 29-41
- Sacks, H., & Schegloff, E. (1979) Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction. In Psathas, G. (Ed.) Everyday language: Studies in ethnomethodology. New York: Irvington. pp. 15-21
- Schegloff, E. (1980) Preliminaries to preliminaries: “Can I ask you a question?” Sociological Inquiry 50, pp. 104-152
- 高木智世 (2009) 「社会的実践としての日常会話 II—親しさの実践—」『論叢現代語・言語文化 Vol 3』 pp. 47-64

記号の一覧表

- [オーバーラップの開始位置
- [[発話が同時に開始する位置
- = 2つの発話が途切れなく密着している
- (m.n) その秒数の間合いがその位置にある
- (.) 0.2秒以下の短い間合い
- °° 音が小さいこと
- () 聞き取り不可能な部分
- (言葉) 聞き取りが確定できない部分
- 発話:: 直前の音が延ばされている。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している
- 言 - 言葉が不完全なままで途切れる
- h 呼気音・笑い。相対的な長さをhの数で示す
- .h 吸気音。相対的な長さをhの数で示す
- 言(h) 呼気音を伴って言葉を産出していること
- ¥¥ 笑い声・笑顔で発話されていること
- 発話 下線部分に強勢がおかれていること
- . 下降調抑揚
- , 継続を示す抑揚
- ? 上昇調抑揚
- ↑ 急激な上昇調抑揚
- >< 発話のスピードが目立って速くなる部分
- <> 発話のスピードが目立って遅くなる部分
- 分析対象の発話

An Examination of a Procedure for Recipients to Infer Why the Projected Action Is a Delicate One

Changjiun Du

Abstract

This paper describes the cases where a referring expression is produced in a truncated form (a noun produced in a falling intonation) after an action, such as a question or a request, is projected. When an utterance projects that a certain type of action will occur, it can be followed by a referring expression with a rising intonation. In that case, the recognizability of a referring expression is going to be checked in order to conduct the projected action without any recognition problems. However, there are occasions where a referring expression is produced in a falling intonation. Such utterances show that the speakers believe their recipients can definitely recognize the referring object. In this paper, I show that such utterances not only claim the definite recognition, but also make their recipients infer why the projected action may be a delicate one from the shared knowledge of the interlocutors' life history. In the analyses, I demonstrate how this is done.